小千谷縮

小千谷縮は苧麻、ラミー製の軽量でシボのある生地であり、新潟県（旧越後国）小千谷地域の特産です。このきめ細かいシボのある生地の生産には、雪と長年にわたる職人の知恵が不可欠です。工程では、植物繊維の抽出や糸への加工から、織物を雪で自然に漂白し柔らかくするまで、多くの世代にわたって受け継がれてきたさまざまな技法が必要です。

小千谷縮の生産は、イラクサ科の多年生植物、苧麻（*Boehmeria nivea*）の収穫から始まります。苧麻からは、亜麻（リネンの原材料）や大麻のように、布を織るのに適した靭皮繊維ができます。茎の外皮から靭皮繊維を剥がし、手間暇かけて細い筋に裂いた後、端と端を手でよりあわせて細い糸にします。糸にはさらに絞り染めを行う場合もあります。その後、柔らかく軽量の生地へと織っていきます。織り作業後、生地をお湯で洗い、晩冬の日光のもと雪原の上に数日間広げ、白い部分を漂白するとともに色を柔らかくします。雪原に広がる、この手織りの生地の調和のとれた色と模様は、まるで芸術作品のようです。

軽量でシボのある生地
小千谷縮には、織り作業の前後で行われる工程により、きめ細かな「シボ」ができます。この布が織られるのは冬ですが、蒸し暑い夏に身に着けるように作られています。柔らかいシボが、肌に生地が不快にまとわりつくのを防いでくれます。

仕上がりにシボのある生地をつくる際、職人は、織り作業の前にまず緯糸を強くよって糊をつけ、それから織布を水で揉んで糊を落とさねばなりません。布を手洗いすることで、手洗いすると、糊付けされた扁平な横糸が緩んで縮み、縦糸が引き寄せられるため、独特のシボが生まれます。この波状のシボが小千谷縮の特徴であり、小千谷の南にある南魚沼で生産されている類似の越後上布といった他の苧麻製の生地との違いです。

雪と水からの恵み
小千谷の天候と環境は、小千谷縮の生産工程に不可欠です。苧麻の繊維は、乾燥した環境では容易にちぎれてしまうものの、雪の多い小千谷の湿った冬では柔らかくしなやかなままです。苧麻の茎をぬるま湯（伝統的には雪解け水から作ります）で湿らせ、それを髪の毛のように細く裂きます。

この糸に、布海苔という海藻を煮た糊を塗布することで、なめらかにして織りやすくします。織り作業は、よく雪の降る季節である冬の湿った環境で行われます。その際も、弱い糸を常に湿らせて、糸が切れないようにします。

布は、織った後、湯もみと呼ばれる工程で再びお湯につけて揉みます。最終工程では、生地を、数日間、雪原の上に丁寧に広げておきます。太陽と、溶けていく雪が、生地を漂白し、織られた繊維を柔らかくしてくれます。

小千谷縮の伝統遺産
小千谷縮を織る技法は、17 世紀以前から何世代にもわたって受け継がれてきました。江戸時代（1603～1867 年）、この洗練された生地でできた着物は人気が高く、夏に適した涼しい軽量の着物として武家の男女たちを装っていました。縮は、伝統的には着物に用いられていましたが、現在、職人たちは、シャツ、ドレス、スカーフなど、その他の種類の衣類も作っています。

小千谷縮は、小千谷の南にある南魚沼（新潟県）で生産される越後上布と非常に密接な関わりを持っています。生産技法はほとんど同じですが、越後上布の生地の方が滑らかです。この 2 種類の生地は、あわせてユネスコ無形文化遺産に指定されています。